

- 1、使徒言行録を御一緒に読んでいます。この文書は「ルカ・使徒」2巻物の歴史物語です。強烈な神学的主張を持っています。それは物事を神の救いの歴史として綴って観る（「救済史観」）考え方です。後々正統的キリスト教の歴史観の基になったものです。だから、よくいえばそれは一つの骨格ですが、悪い意味では、それが正統主義として作用する時、他の考え方を排除してしまい、自己を相対化して対話を生みず思想にはなりません。この両面を注視したいと思います。
- 2、今日の箇所は「集会の一致」(12-14)「使徒の補充」(15-26)の物語です。「イエスの昇天」と「聖霊降臨」の間におかれて、初代教会が活動する前に、決着を付けておかねばならない課題が扱われています。ペトロの演説の中に組み込まれた「ユダの死」は他の福音書にもあります(マタイ27:3-10)が、著者は「裏切り者」(ルカ6:16)の見解を取っています。ここは伝承をもとに著者が構成した物語であり、エルサレム教団最初期の史実を反映するものではありません(荒井献氏)。
- 3、「ユダ」ブームが2006年『ユダの福音書』の公表で起りました。『ユダとは誰か』(荒井献、2007/5岩波書店)によれば、ユダをその「罪」のゆえ追放したのは正統的教会で、「イエスの十字架はユダを受容した」とまとめられています。
- 4、「使徒職」は12人でなければならない、とはイスラエルの十二部族の考えを継承しています。「職を継ぐ」ことは神の命令でした。「その務めは他の人が引き受けるがよい」は詩編109:8のギリシャ語訳(LXX)の引用です。生前のイエスと共にいたものの中からにこだわるのが「言行録」の著者です。これは、「キリストの時」(イエスの宣教活動の期間)と「教会の時」(イエスは天にあり、宣教活動は「教会」の働きにまかせられている)との区分をはっきりさせる考え方に由来します。
- 5、22節の「なるべきです」は「ユダの死、補充の選出」が強い「神の意志、神的必然」であるというルカの歴史観の表れです。二人を選んで、あとは籤により「神の決定」を重んじます。ヘレニズム・ローマ世界では広くとられた方法です。使徒職の全体が欠けたのを補うので、個人の資質はここでは問われていません。「すべての人の心をご存じである主よ」。2-3世紀の文献のみに確認される神への呼び掛け。
- 6、使徒職に補欠を主題とする新しいペリコーペの導入は「その頃」(15)で始る。この句が用いられるところ3ヶ所はみな、「奉仕(ディアコニア)、教団の『卓』『援助』『奉仕』」に関わる(1:15-26, 6:1-6, 11:27-30)。この語から執事(deacon, カトリック[助祭]、新教[執事])が出てきました。もっぱら教会組織運営の奉仕や治会の仕事を意味します。宣教(み言葉の奉仕)と区別されました。
- 7、さて、二つの事を心にとどめます。①教会を担う「使徒」を継ぐ役目は個人的資質より、神の選びが大事な事。②「ディアコニア」は運動・隊列(組織)の中で体を使う「ご奉仕」である事。教会の歴史には「奉仕の務め」に歩んだ信仰の先達がたくさんいます。そのような「任務を継いで」ゆきたいと思います。